

心理アセスメント(ロールシャッハ法)のスーパーヴィジョン

八尋 華那雄

(中京大学心理学部心理学研究科)

1. はじめに

この小論文の内容は、平成15年9月27日に広島大学で行なわれた、心理臨床教育研究センターの研修会で話をしたものである。ロールシャッハテスト(以下ロ・テストと略す)を中心とした心理アセスメントのスーパーヴァイズは、今までにも、大学院の演習、心理臨床の勉強会、ロールシャッハ学会や地区の研修会で度々行なってきたが、スーパーヴィジョンそのものについて、その内容を振り返るのは、初めてのことであった。研修会では、ある勉強会で、過去6年間定期的継続的に行なってきた面接とアセスメントのスーパーヴァイズ経験を基に、ロールシャッハ法のスーパーヴィジョンのあり方について言及した。文章にするようにとの要請があったので、あらためてここに少し加筆して示してみたい。

筆者は前述したように、1998年より現在まで心理面接と心理アセスメントの勉強会でスーパーヴァイズを行なっている。場所はS県M市で、参加者は県下の臨床心理士や臨床現場で働いている心理士、大学院生など10名程である。初期から参加していたメンバーは、現在ではみな臨床心理士として、公立私立の医療機関やスクールカウンセリングの領域で働いている。D会と称するこの勉強会での継続的研修は、日本臨床心理士資格認定協会の継続研修としても認められている。開催頻度は月1回(計、年10回)である。心理面接の事例検討とアセスメントの検討の二本立てで行なわれ、ロールシャッハの事例検討は2時間をかけて行なう。面接の事例と同じ事例を合わせて検討することもある。

2. スーパーヴィジョンを行なう筆者の Scoring System

事例検討会に提供されるアセスメント・データはロ・テストだけではなく、知能検査や描画、質問紙など、事例提供者が組んでいるテスト・バッテリーの全資料が提示される。そのような際でも、ロ・テストを中心に検討を行なっている。ロ・テストを用いる際のアプローチにはいくつかのシステム(片口法、阪大法、名大法、精神力動的アプローチ、エクスナー法)がある。どのスコアリング・システムに準拠しているかによって、施行法や整理・解釈上の視点や理論が異なってくるので、出来ればスーパーヴァイザーの準拠するシステムが明らかにされ、スーパーヴァイザーに選択する余地があることが望ましい。例えば、近年は解釈への道筋の明確さなどからエクスナー法が注目されており、客観性を重んずるテスターや若いコンピュータ世代のテスターにはこのシステムがフィットするように

思える。一方、量的研究への批判から、やはり最近注目されているナラティブ・アプローチに関心をよせていたり、ロールシャッハ場面をカードを挟んだ面接場面と捉えるテストは、テスト―テストティーの2者関係とそこで語られたテストティーの連想や両者の間の質疑応答の内容や流れを大事だと考えるであろう。

筆者が準拠しているスコアリング・システムの基本は片口法（修正クロッパー法）で、加えて名大法の感情カテゴリーや阪大法の表現型、クロッパー法の予後診断尺度（RPRS）などを合わせて用いることが多い。筆者は、ロールシャッハ場面・ロールシャッハ反応を、「与えられた図版や課題などの外的刺激への順応という現実機能が要求される場面であり、テストティーが課題をどう受け止めてこなし、その判断と判断に至るプロセスをどう他者（テスト）に伝えるかを見ている。そこに見られるテストティーの方略は日常生活でその人が用いる問題解決の様相やコミュニケーション能力を反映している」と考えている。だから、筆者にとって、質疑段階でのやりとりがテストティーを知る最も豊かな情報源なのである。

3. 初心者がプレゼンテーションを行なう場合

ロ・テストを施行し、記録やスコアリングはできるが、解釈や結果の報告の経験が少ないテストが事例を提供するような場合を云う。個々の反応の検討に入る前に、発表者に次のことを確認する。それは、どのような意図の下、どのような状況でテストが施行されたかを知るためである。

- ①勤務先での職種や業務内容
- ②依頼者とテストの関係
- ③検査の意図・目的
- ④テストティーの受検への意欲
- ⑤テスト側の問題（忙しさ、経験頻度など）
- ⑥導入の具合
- ⑦施行中のテストティーの印象
- ⑧結果は誰にどのような形で返すか

ロ・テストのデータは、スーパーヴァイジーからテストティーの氏名・年齢・性別・家族・問題歴・精神医学的診断などの情報を聞いた後に、カード1枚ずつ自由反応段階・質疑の順に読み上げ、スコアを確認する。この時点での確認事項は、「記録はテスト場面を彷彿とさせるように正しく表記されているか、質疑の過不足はないか、スコアは反応をよく反映しているか」などである。筆者は、スーパーヴァイジーに、テスト―テストティーのやり取りが彷彿とするような具体的で詳細な記録を求め、そのやり取りの一言一句がテストティー理解のために重要な情報を提供してくれると思うからである。質疑は、ロ・テストでは最も大切な作業で、なぜそのような質疑を行なったのか、テスト自身がよく質問の意図を理解しておかねばならない。また、スコアリングには、特に決定因をスコアする際に、テストの癖が出るのがよくある。その癖を見出し、修正する努力が必要である。この段階でのスーパーヴィジョンの主眼は、次回から更に有益で詳細なデータを採れるようにすることである。

続いて、反応時間・スコア・反応内容・言語表現からテストティーの反応の特徴やパーソナリティについての読み取りの作業を、各カード毎に行なう。ここで大事なことは、問題点ばかりに注目するの

ではなく、健康で優れた点も拾い出すことである。反応の特徴をスーパーヴァイジーに主に尋ねるが、グループの他のメンバーの仮説とその判断過程を知ることも重要であるので、他のメンバーからも意見を求める。それが、スーパーヴァイジーに欠けた視点の発見に繋がるからである。次は、読み取りを終えた情報をどのようにまとめ、組み立てるかの段階に入る。この時には、結果を返す相手を念頭に、まとめることが求められる。ロールシャッハ用語や記号を羅列しても、他のチームの人に必要なが伝わらないことは言うまでもない。できるだけ平易な言葉で結果を適切に表現することに慣れなければならない。そのためには、報告書を提示し、多くの人の意見を聞くことが望ましい。有体に云えば、結果の報告書はテスターの投影した反応なのだから、自分の主観的な表現を排し、必要で有益な報告ができるように訓練することが必要である。また、報告書にはバッテリーを組んだ他の諸検査の結果との照合についても触れておかねばならない。他の検査結果との異同を、どのように理解するかについても、皆で検討する。最後に検査データと報告書に至るまでの検討を書き記したノートの保存と管理も習慣化しておくように求める。特に治療効果の判定を行なうために、再検査を施行する場合を念頭に、データが散逸しないようにすることが大事である。

4. 中級者がプレゼンテーションを行なう場合

上記のことが一応できる人を、中級者と考える。適切な頻度でアセスメントを行ない続け、自ら結果の整理や報告に従事し、繰り返事例を発表してスーパーヴィジョンを受けることで、この段階に達する。

アセスメントとセラピーは心理臨床活動の両輪と云われる。セラピストは両方の技法と理論に精通していることが求められるが、面接を担当しているセラピストが、クライアントにアセスメントを行なうことの是非が話題になることも多い。しかし多くの現場では、臨床心理士が一人という所もある。両方の役割をこなす臨床心理士にとって、アセスメントの道具や時期とセラピーの経過との関係は慎重に考えなければならない事柄である。このような状況にいるセラピストは、行動観察などによるアセスメントではなく、テストを用いたアセスメントを行なうことの治療的意味を自分で考えることが必要となる。即ち、「テストされること、テストを行なうことが双方にとってどのような意味をもつのか」を理解している必要がある。更に、アセスメントのフィードバックをセラピーに役立たせるためにどのように結果を利用するか、どのようなフィードバックが望ましいかなどを、このレベルのテスターは知っておかねばならない。セラピストにとってアセスメントをすることの意味が十分理解できていることと、結果の治療的返し方の方略が立っていることはアセスメントを行なう本当の意味が解っていることだと云える。

以上のようなアセスメントとセラピーの関係に注意を払うことに加え、テストティーがどの病態水準にあるか、自我の健康さはどれ位かと云ったことの評価にテスターが精通するためには、多くのデー

タをみることと、ブラインド・アナリシスでデータを読む力を着けることが必要である。この時期は、データバンク的基礎データに多く触れ、病理群の反応傾向を含め、年齢・性別・病態と云った要因別にロールシャッハ反応の特徴を知る時期でもある。そのためには、コンスタントにデータを採ること、他の人の事例報告を聞くこと、文献による病理群の特徴の学習などが求められる。

5. 上級者がプレゼンテーションを行なう場合

以上のことができるようになれば、上級者と云ってよいのではなかろうか。この段階の者はスーパーヴィジョンを行なうこともできるであろう。筆者は、この段階の者は自らがスーパーヴィジョンを受ける必要があると考えている。ロ・テストは先に述べたように幾つものスコアリング・システム、解釈アプローチがあり、それぞれのアプローチは特異で優れた特徴を持っている。学会のワークショップに参加して他のシステムに触れ、研修会などで事例を提供し、他のシステムの良い点を学ぶことが必要である。そうすることで、自分の包括システムを作ることである。そうすれば、データの情報処理の中がもっと広がることが期待できる。